
蓮 (ハチス)

燈 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蓮（ハチス）

【Nコード】

N7079Z

【作者名】

燈 優

【あらすじ】

そこにあるのは水盆に蓮。
気付けばそこにいた。
なぜと。疑問の浮かぶままに。

蓮の花が浮かぶ水盆の側らに、ひとり。座っている。紅い漆器の水盆には水が張られ、それを見るように片膝を立て。浮かぶ蓮は水面とは接しておらず、みすなかけれど水盆に、浮いている。

厚みの少ないはずの水中には、どこかの村が見える。浅黒い肌をした人々が日々の生活を生きる姿に、時折はしゃぐ子供たち。痩せた、決して清潔ではないその姿に。にじむ悲壮は少なく、そしてまた、少なくはなかった。

立っている片膝に乗せた手に、さらに顎を乗せ水盆を覗き込むその周辺は。やはり同じような水盆が点々と在り。やはり同じように蓮の花が浮いていた。

ふと、水中の情景が変わる。それは青白く。もう二度と光を映すことのない眼窩に蠅が止まっていた。しばらく、動かぬままだった蠅がころりと落ちた。落ちたそれは、再び動くことはなかった。青白い傍に、狐か、それとも違う動物か。少ない足音と共に歩み寄ったその動物も。一度瞬き。少ない土煙を上げて、地に伏した。

その光景には、動くものはなく。しかしそれでも日は移ろい、時は流れていった。そこに変化はなく、ひどく不変的で、安心感のあるものだった。

ふと、曲げていた背を伸ばし、首を傾げる。そもそも何故、このようなところにいて、このようなものを眺めているのだったか。霞みがかった思考にそう思う。すると音静かに、ちりちりと鈴（この場合は鉦物）の合わさる音が近づいてきた。気付けば水盆を挟んだ向こう側に、芙蓉にも、蓮にも似た大きな花を頭に飾った女人が座にょにんしている。美しい。高いところでひとつに結った長い黒髪に、幾つもの簪が眩い。ちりちりと鳴っていたのは、簪から帯のように連なっている欠片だろう。着物に似た、幾重にもなっている装束を身に纏っている。

つ、と。陶器のような白磁の肌に見惚れていると、閉じたままの口から言葉が聞こえた。

命あるものがなければ、そこは穏やかな世界だろう。

切れ長の眸は真っ直ぐに水盆を挟んだ対面に向けられる。聞こえた言葉に、疑問は抱かず、口を開いた。

「それはさきほどの情景か。」

そうでもあり、そうではない。

「しかしそれは穏やかなだけのつまらぬ世界だ。」

つまらないといけないのか。

「いけないことはない。ただつまらないというだけだ。」

ちりり。肌を撫ぜるほどもないゆるりとした気配が簪の帯を揺らす。

ならば構わないだろう。お前はこの先も、幾先も。ここにいてそれを眺めればいい。

「何故。」

何故。

「ここにいる。」

それはお前がここににいるからだ。お前はここにいて、故にお前はここにいて。

「しかし」

しかし

「ここには最初からはいなかった気がする。」

それは正しくもあり、誤りでもある。

「元は、ここから見える世界の中に。水盆の、この中のどこかの世界に、いた気がする。」

それは正しくもあり、誤りでもある。

「何かを思い出しそうな気がするが、しかしここでは思うことはいけない気がする。」

ここにあるものは考えない。流れと共に必然と漂っている。

「ならばやはり、おれはここにいてるものじゃない。」

それならば思うことをやめたらいい。

「それはできない。一度気がついてしまえば、それはもう取り返しはつかない。」

浮かぶ蓮が、ゆっくりと回る。水面は凪いで、揺らぐ風もないにも関わらず。薄桃と透ける蓮は、ゆっくりと女人の顔を隠し、そしてまた表した。紅い漆器の水盆には、何も映ってはいない。

ならばどうする。

瞬きもせず、変わらぬ色をした眸が真っ直ぐに見ている。否、見ていると感じているだけかも知れない。それはひどく遠いを見ているような気にさせる。

「戻る。」

どこへ。

「おれの居た世界へ。」

ただ、過ぎてゆくだけの穏やかな世界を見ただろう。

「ああ。」

本来にある世界とはああいうものだ。

「生きたもののいない世界か。」

そうだ。

「しかしそれでは寂しいだろう。」

何も思うものがいなければ、寂しいと思うものもないさ。

「人のエゴか。」

かも知れぬ。

「ならば。」

ならば。

「生きているということは異常か。」

肯であり、否である。

「命があることが、異質なのか。」

肯であり、否である。

「ならばここは、」

片膝を立てている姿勢は変わらずに。顔だけが、向かいに座す女人を見ている。点々と在る水盆のひとつに、滑らかな黒に近い漆の水盆の前に。ひとり、女性が座りじつと水中を眺めている。その顔は穏やかで、見える何かをそつとそつと見守っているように。しかしそれに、気付くことはなかった。

「戻る。」

異常の蔓延^{はびこ}る世界へか。

「ああ。」

それは、欲か。

「かも知れぬ。」

欲しかない、世界だぞ。

「その異質にしがみ付いているのは、そこに捨てきれぬものがあるからだ。」

何を思っても欲にしかならぬ。

「そうだ。大切なものと思うのも、それすら詮方ないことに。欲の表れでしかない。」

それでもお前はいくというのか。地獄のひとつへ墮ちるのか。

「六道どこに落ちたって、己が魂^{こと}だけは捨て置けぬ。」

しゃりん。立ち上がった女人の簪が絢爛と鳴った。白磁の陶器^{くちびる}のように滑らかな表情は、つと変わらぬまま。しかし初めて口唇を開いた。

『そうか。それならいくがいい。あちらが嫌になったらまたおい

で。アタシはいつでも此処に居る。」

清々しい朝を迎えた気分で眼を開けると、そこは見知った土手だった。先日の雨で増水した川の流れは未だ収まらずに、激しい音を立てて流れている。いつからここに転がっていたのか、高い青空がやけに綺麗に見えた。

夢を。見ていた気がする。

どうも頭がぼやけてはつきりしない。土を払うと、なぜか服が湿っている気がする。首を傾げつつも濁流を見、辺りを見回すと河川敷にある小さな公園が見えた。なんととはなしにそちらへ向い、植えてある木の縁に、目が覚めるような感覚を覚え。子供たちがはしゃぐ声に、我知らず口を開いた。

「ならば足掻いてやるうじゃないか。異質でしかないこの生を、人間道という地獄にて。」

何故そのそうなことを言ったのか自分でも理解できぬうちに、口は弧を描いていた。

空が青く晴れ渡り、熱を帯びてきた風が子供たちの声を遠くまで響かせる。濁り荒れている河も、そのうち透明に戻るだろう。

それまでどうしていたのかは思い出せなかったが、それより大切なことを思い出した。

いけない、彼女と会う約束があつたんだ。

慌てて走り出す後姿に、どこかで自分の声が聞こえた。

生きている世界は美しい。

(後書き)

(2010.6.11.作成)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7079z/>

蓮（ハチス）

2011年12月23日19時52分発行